熊本・徳永直の会会報

第１９号

時は移り、新しいノートに変る
ー第十一回孟宗忌を終えてー

徳永直の文学碑が出来てから十一年が経った。孟宗忌も十一回というわけだ。「記録・一九七八・二・一五～」と記されたノートが丁度終りになった。この字は故高光義明氏のものだ。熊本・徳永直の会の結成総会の記録がある。一九七八・四・二七（木）午后七時～九時、黒髪校区社協会館二Ｆ。この場所は高光さん宅の斜め前にあった。元公益質屋の建物であった。出席に、坂本久馬、林敦、宮崎政喜、平晋一郎、中田幸作、中村青史、岩本税、高光義明、重信純子、堀路子、前田市次郎、津留繁雄、木庭克敏、柴田徳義、三浦良子、以上一五名とあり、会則が決められ、役員として、代表幹事中村青史、高光義明、幹事、岩本税、前田市次郎、千葉昌秋と記されている。第二回孟宗忌のメモで高光氏の筆跡は途切れている。高光さんの発病は一九八〇年八月一六日であったから、第三回孟宗忌は彼の手で行われていたはずだが、この記録簿にはない。第五回孟宗忌に署名している津留繁雄氏もその後やがて故人となった。中村が東京に内地留学している時であった。そのころの筆跡は岩本税氏である。第十二回孟宗忌からは新しいノートになる。（中村）

第１１回孟宗忌に集った人々

徳永直のリアルな目
ー「黎明期」を読んでー

千葉昌秋

徳永直の「黎明期」を読みました。阿蘇五岳をのぞむT町とあるから、現在の立野のことでしょう。二十一歳の「私」は十回も職を変えたあと、変電所の職工として「始めて見知らぬ土地へ稼ぎに出る」のです。結局は「労働問題演説会」を計画したという理由で会社からクビ切られ、再び熊本に帰っていく――そんな筋立てです。「他人の中」の手法を感じさせる描写ですし、下女のツルに似た賄女の娘おミツも登場します。読みすすむ中で、私は人物描写の緻密なのに感心しました。「俺が世界で一番偉いんだ」と公言する粟津技師、当時の金額で五百円の週給を受取っているドイツ人技師。何よりも職場での労働の場面は圧巻です。

高圧線の工事のさなか、感電した吉村工手が鉄塔から「ボロ屑のように」落ちてくる。「叢(くさむら)につっこんだ吉村の顔面はパン色に焦げ――両腕は赫黒く爛れてむせっぽく、辛酸っぱい匂が、プス、プスとたちのぼっている」。こんな描写は実際に現実にぶつかっていなければ書けないはずです。また不意に襲ってきた落雷から送電機を守る労働者たちの描写も目に見えるようです。始めと終りの部分に母親が出てくるのも感動的です。

徳永直が、自分の故郷である熊本をこよなく愛していたことがよくわかります。その強い思いをにじませながら、自分の歩いてきた道を〝生い立ちまでさかのぼって〟見直したのが、「黎明期」だと言われています。感傷的な描写に流れた部分も目立ちますが、発電所で働いた若き日の徳永直をかいま見るような気がしました。

赤い風船

沢田博行

雑踏の中
靴をかきわけるように
草が生えている

転がる石の
呟きを
雨のように聞きながら

土の中の根を
持ち上げようとしている

希望はネガの先
泥のように働いて

陰とともに消え失せる

街の埃を吸い
花も咲かず
実もつかず
ただ葉から

ゆらめく風に
翻弄され

夢をぶらさげて
風船が舞い上がる

「八年制」の内容・構成と登場人物について

今西　紀代子

(一)　内容・構成

作品は、六章より成る短編である。

まず、第一章では、主人公・鷲尾が「義務教育八年延長案」についての「H文相の大英断」という新聞記事を読んで、疑問を感じ、腹をたてる。その疑問とは、貧乏な保護者達は延長を歓迎するだろうか、というものである。この答として、第二章では、長男の進学問題から派生して、周囲の子供達とその家庭の経済状態を考える。そして、第三章以下では、さらに具体的に、子供達を取り巻くさまざまな問題を取り上げていく。

その問題とは、第三章で述べられる「試験地獄」（例・富裕な子供達と貧しい子供達との違い）であり、第四章においての教育の「不自由さ」（例・長男の受持の退職）であり、第五章における「受験児童」の不健康な姿や東北地方の「飢餓地獄」（例・欠食児童」の姿）であり、第六章における子供の就職問題である。

そして、最後に第六章の末尾で再び第一章の新聞記事について考え、これらの問題をH文相や教育家達に向けて投げかけるという、首尾照応した構成となっている。

(二)　登場人物について

―鷲尾一家と徳永一家との対比―

作品の第一章では、主人公・鷲尾、およびその家族のことが紹介されている。これを作者・徳永、およびその家族と比較することによって、主人公一家を明らかにしたい。

まず、鷲尾については、「職工から作家になった男」「尋常四年制が六年制に変った、最初の年の卒業生」「尋常六年の二学期まであがって、それから工場に入れられた。」という記述がある。これから判断して、鷲尾とは、徳永自身であると言ってよいと思われる。が、しかし、厳密に言えば、徳永は、「六年制に変った、最初の年

の卒業生」ではなく、次の年の卒業生である。年譜によれば、徳永が黒髪尋常小学校の五年生に進級したのは、明治四十二年である。ところが、最初の尋常小学校第五学年が成立したのは、明治四十一年なのである。だから、作品では大まかに表現されていると言える。

次に、「長男」は、「尋常四年」と記されている。その「長男」が徳永の長男・光一だとすると、光一が四年生に進級したのは昭和十二年四月のはずであるので、作品の「長男」の年齢は、作品の発表時（昭和十二年六月）における光一の年齢に一致させて描いてあるということがわかる。また、「長女」が「二年生」というのも同じく一致する。しかし、「三番目は来年入学、一等ビリはまだ乳を呑んでいる」というのは一致しない。

また、作品中の「細君」については、「小学五年までしかあがることの出来なかった」「亭主の書いた小説さえ一頁だって読んだことがない」とある。調べたところ、徳永の妻トシヲの学歴は確認できなかった。が、参考までに、『妻よねむれ』（昭和二十三年）の中の「妻」に関する記述を挙げてみると、「お前は三年生の中途で、学校をやめた。」（七章）、「亭主の書いた小説さえとうとう読んだことのなかった」（十六章）とある。

注１　浦西和彦編『人物書誌大系1徳永直』（日外アソシエーツ、昭57・5）の中の「年譜」に拠る。徳永は六年生の中途で通学はやめたが、卒業はできている。

注２　国立教育研究所編集発行『日本近代教育百年史第四巻、学校教育２』（昭49・３）の第五篇第一章の三の１「義務教育年限延長の成立」に拠る。

注３　注１によれば、長男・光一は昭和二年八月生まれ。

注４　しかし、作品の社会的背景は前年度のものである。（義務教育八年延長案」が閣議に提出されたのは昭和十一年十一月）

注５　注１によれば、長女洋子は昭和四年十一月生まれ。

注６　注１によれば、二女・みちよは昭和七年六月生まれ。三女・街子は昭和九年七月生まれ。街子は、もう乳を飲む年齢ではなかろう。

事務局だより

△　第十一回孟宗忌は二月十四日（日）午後二時半から挙行。新聞は約三十人参加と書いていたが、受付に記入し会費を納入した人が二十五人であったので、学生をそれに加えると四十人にはなっていたはずである。

△　会報がすっかり遅れてしまった。せっかく助っ人も現れて、発行態勢は万全であったはずだが、中村の怠慢がこの結果を招いた。責任転稼ではないが、一つには当日のハップニングの後遺症でもあった。

△　五月八日の第七回呑牛忌に、「反核平和を願いつつ第七回呑牛忌に連帯のあいさつを送ります」と打電した。

○会報に原稿を……どんなささいなことでも徳永直に関する文章や情報をお寄せ下さい。

〒　熊本市黒髪二―四〇―一　熊本大学教育学部中村研究室
電話　〇九六（三四四）二一一一（代表）内線二五八四
振替　熊本四―一一四九八番　熊本・徳永直の会

印刷所　㈱昭〇　刷　三四四―五二五二・三四三―三八八六